平和は歌ごえから
九州のうたごえ大成功

九月二十三日第二回「九州のうたごえ」は大分市体育館で開かれ、遠く沖縄からの代表も含めて全九州から集つた各地の職場、地域、農村から「うたごえ」の見えぬ糸で結ばれた男女青年、家庭の主婦から、壮年層へと、さしもの体育館は五千名を迎える人の波で一ぱいになつた。各サークル、地域産業別のうたごえに、沖縄代表の民踊おどり、色とりどりの「うたごえ」がつぎつぎとくりひろげられ、歌う方もきく方も一緒に手拍子をとり、すべてが五千名一緒にうたわれているような気がする。全員の共感がふくれ上つて、大分の空にひゞき渡るようであつた。

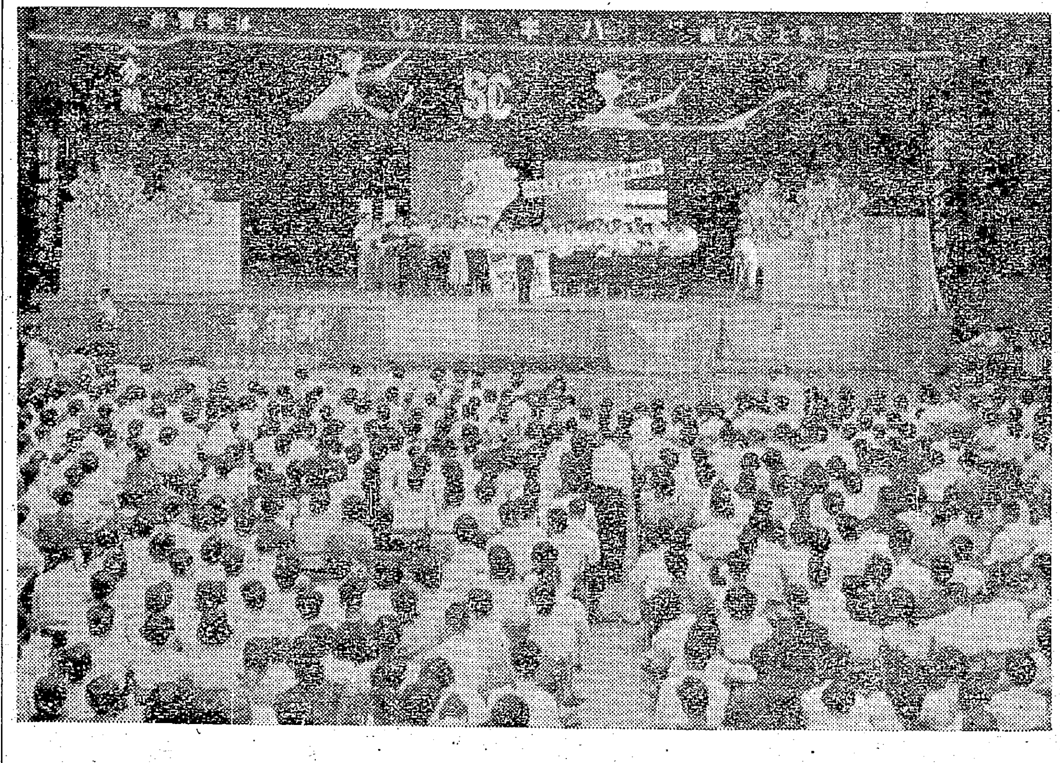
五千余名が集る

大会は中央合唱団の指導者北川剛氏を迎え「九州のうたごえ創作曲集」の歌唱指導でフタを開け、全九州アーコデイオン合奏団の演奏で「若者よ」「しあわせの歌」「仲間達」の全員齊唱があつたのち実行委員長清末清文氏のあいさつで第一部に入つた。「手のひらの歌」「山小屋ぢいさんの話」の宮崎のうたごえを皮切りに鹿児島、佐賀、筑豊、大分など十四地域の代表によるうたごえが紹介され、特別演奏として亀川国立病院合唱団、吉井合唱団のコーラス、モリタンゴアンサンブルの演奏、蒲池華頌氏の独唱などがくりひろげられ昼すぎ第一部を終了した。

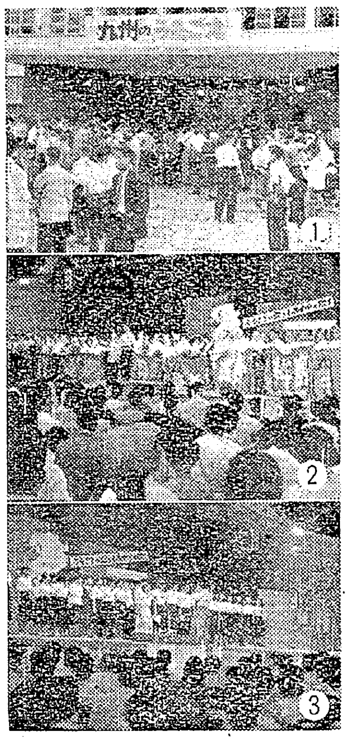
第二部は午後一時すぎ全司法のうたごえ「沖縄を返せ」はじめ各職場のうたごえ五十一曲が歌いまくられ、特別出演として朝鮮民俗舞踊、奄美大島民謡、沖縄民芸、沖縄楽人会による唐手がそれぞれ満場の拍手のうちに紹介された。最後にデモで舞台に出場した炭労の「炭坑ばやし」を荒木栄氏が指揮し感激の八時間の地方、職場のうたごえが終つた。

廣まるうたごえ

恒例の全員合唱は「しあわせの歌」「仕事の歌」「荒城の月」を北川剛氏をはじめ沢山の指揮者がつぎつぎにタクトをとり、つきない名残りをいつまでもうたい、「わか者よ」を最後にみんな感激を胸にまた職場へ家庭へ農村へ帰つて自由と平和の「うたごえ」をひろめるために帰つて行つた。



〃九州のうたごえ〃幕ひらく（宮崎のうたごえ）



【写真説明】　(1)九州のうたごえ会場　(2)炭鉱のうたごえ　(3)長崎のうたごえ

大牟田から大量参加

九州のうた声には大牟田より三鉱労組の三川、三作、港務支部、東圧労組の各組合及び水曜コーラスその他百三十余名が参加した。大牟田のうた声として「仕事のうた」荒木栄氏が作詞・作曲した「新さくら音頭」を同氏の指揮で発表し、満場の拍手を得た。この大会に参加した三川のK君は共同デスクに次のように感想文を寄せて来た。

私たち大牟田市「三川歌の会」一行はたくさんの組合員から駅頭で合唱で見送られ一路大分へ向つた。大牟田より同行する十三の歌声サークル総員百三十余名の人たちとの車中での合唱、昨日まで顔も知らなかつた人達だが、歌声によつて百年の知己の人のように疲れも忘れて車中われんばかりの大合唱、こんな楽しい車の中は生れてはじめて味わつた人もたくさんおります。鳥栖駅では佐賀のコーラスの人々と「幸の歌」「我らの仲間」を交流合唱し、ほのぼのとした本当に人間同志の友情を感じました。

今度の九州のうたごえには大変期待してまいりました。もつともつと新聞もラジオも大きくとりあぐるべきではないでしょうか。それは汗にまみれ、苦しい労働の中から叫び出るうたごえが、こんなに拡まつていくことは昔とくらべれば大変な出来ごとと思うからです。

仲間手を組む

水曜コーラスのT君は

昨年の長崎よりまちつづけた一年、仲間と再会できたことを心の底から言葉でいゝ表わしえないほどの喜びと、平和な何ものにも屈しない心強さを感じました

ぼくたち水曜コーラスは、みんな資金カンパで参加しています。参加できなかつた仲間は「九州のうたら仲間達としつかり手をつないできてくれ」といつて小づかいを全部カンパ箱に投じてくれました。又大牟田に働く自由労組のオバさん、学校の先生と平和な生活を望むあらゆる人たちがぼくたちに資金カンパをしてくれました。

ぼくたちは「九州のうたごえ」の感激を友情の中に、さらにガツチリと九州の仲間、いや世界中の仲間と手をつながなければいけないと思つています。これが僕達にカンパしてくれた人たちの期待にむくいるものと思いました。

初参加で感激

三川支部のH君は

歌声の大集会なんてどんなものだろうか、私は経験がないだけに大変な興味をもつて参加しました。

いよいよ二十三日の本プロに行つて私達自身地方別で「桜音頭」と「仕事の歌」を力強く感激しつゝ歌い続けました。なんともいえない力強さが実さいに湧き上つて来るのを感じました。私達は本当に強いんだ、何者にも負けない底力があるんだなあという事を深い理由はわからないまゝそう思いました。

百人が一歩進め

三作支部のH君は

歌声運動の問題点は種々あると思います。その一つとして、我々の職場にどうして拡めるか、ということと、質的に高めなくてはならぬということです。もう一ついわしてもらえば、職場の中の封建性と組合意識の立おくれと、「九州のうたごえ」といつたような中にかもし出される力強く明るいエネルギー、そたを支える一人々々のその後の感情とのギャップです。このギャップは余りも大きいのです。とくに四十三日スト後の職制の巧妙なやり方と、それを敏感に感じとる組合員の間には、本当にしんけんに考える必要のある問題が沢山あると思います。とにかく私がこゝでいゝたいことは、一人が百歩進むのではなく、百人が一歩進むということと、サークル活動の関係、更にはサークル活動の中にあふれるエネルギーを職場の中でどう生かすのか、という問題です。勿論サークル自体の存在価値は申すまでもありません。

うたごえは平和と幸せを守る
＝三鑛関係参加者の声＝

大分市で催された本年度「九州うたごえ大会」には別報通り三鉱関係からも代表者が参加、深い感動を胸に抱いて元気で帰つてきたがいま職場にかえつてどんな気持でいるか二、三の意見をきいてみよう

音樂的に深まつた

各地域のうたごえをきいて感じたことは、それは音楽的に大変ふかくなつているということである。発声もハーモニイも一年毎に美しくなつて行くうたごえを心からうれしく思う「どなる」うたごえから豊かにうたい上げるうたごえは自分たちの生活感情と共に育ちつゝある。それぞれの地域における情緒豊かな民謡が音楽的な香りで次々とうたい上げられてゆく。「ふるさとの歌を」「平和のうたを」というスローガンが舞台に会場に生き生きとみちあふれている感じである。

三作　荒木　栄

善良な集いであつた

大会は大成功であつたろうと実感として感じた。この事は参加者全員が又感じた事だろう。その感激は会場の中でうずを巻いていたそれとももう一つのうずを感じたのは初参加であるぼくの人間臭さの故だろうか、善良な希望に燃えた明るい人達のグループばかりであつた事が本当に気持のいい集いに導いたとぼくは明るい気持を、そして希望を将来へ抱いた。勿論この大会の見通しばかりでなく、又この種のグループが演劇に学研にスポーツにも集いを早くもつように思うものです。

最後に実行委員の方々の御苦労に感謝すると共にぼく達にこんな立派な集いの場をつくらせるために御援助頂いた諸兄に感謝します

港務所　田中了一

主婦も樂しめる歌を

秋空の下に堂々とした大分体育館全九州よりはせさんじた人々六千八百人〃幸わせの歌、ふるさとの歌を〃のスローガンの下に職場地域の歌声、産業のうたごえと次次と繰り広げられ大島青年団や沖ナワ代表者の切実な訴えは胸を打ち、土地取り上げに対する憎しみを新にし沖ナワ救援資金カンパも場内で行われるような次第でした。私達の心のふれ合い、そして明日の希望を与えてくれる歌声は欠くことの出来ないものだと感じました。歌声のある所暗い影はいつしか消え去つて、光と希望に満された心の平安があり、熱い血潮の高鳴りである。生活と結びついた歌特に主婦の人達にも親しめるようなうたを創り歌声を更に地域に、職場に広め、発展させようではありませんか。

うたごえは必ず平和と幸せを守つてくれるのだ。

港務支部書記　前原貞子

九州のうたごえにびつくり

九州のうたごえに中央から派遣されてきた、北川剛氏は、武蔵野音楽学校声学科を卒業し終戦と同時にシベリアに抑留され、井上頼豊、黒柳守綱らと共に楽団をつくり活躍、帰国後中央合唱団講師白樺合唱団指揮者となり、音楽の友、その他の合唱に関する記事、放送も担当しているという経歴の人である。

指揮する北川剛氏

同氏は

うたごえが生活と結びついているので誤解されやすいがこれを政治運動とし反対するものにとつてもどうにもならない大きな国民運動となつている。九州の水準は、日本のうたごえの二年前程度と思つていたが、意外に質が高く、中でも筑後、筑豊、福岡地方はどこに出ても恥かしくない。

と語つた。

沖縄の代表も参加

沖縄からは、儀間トミ子さんをはじめ六名の代表が、アメリカの断圧をハネノケて参加、次のように大会に訴えた。

私達がうたごえに参加するということであれば、アメリカ軍から渡航証明がでないので、それぞれの用件をつくり参加しました。

いま沖縄の人達はみんなが苦しんでいます。なにしろ十一年もガマンしてきました。いまアメリカから最後に残つた少い土地もとりあげられようとしています。みなさん私達は同じ日本人です。沖縄の土地は私達のものです。私達は死んでも沖縄の土地をアメリカに渡しません。私達に協力していたゞくみなさんに、沖縄の代表として、沖縄の民謡をわかつていたゞくため一生懸命やろうと思つています。私達の苦しい闘いに今後も御協力を願います。

満場拍手の中に感激の資金カンパの勧誘が出され、六万円近くの資金が集つた。

沖縄の人へ花束寄贈

九州の皆さんへ

スターリン平和賞を受賞した関　鑑子さんから九州のうたごえに次のようなメッセージが贈られた。

残暑の候御気嫌御伺い申し上げます。

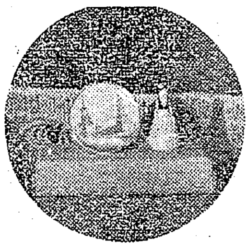
去る五月はじめ国際スターリン平和賞受賞式参列のためモスクワを訪れ、ついで持病療養のため約四カ月間同地に滞在しておりましたが、去る九月四日帰国いたしました。

受賞式は五月三十一日クレムリン宮殿内の広間で、受賞委員会議長スコベルツイン博士の司会で行われました。ソヴエト各界の代表滞ソ中の各国代表の方々五百名が参加されました。殊に日本人として折柄モスクワを訪れた石川達三、村松梢風氏をはじめとするアジア親善文化使節団十数名の方々が参列して下さつたことは本当にうれしいことでございました。こゝで世界で四十三人目の国際スターリン平和賞の賞状とメダルをお受けいたしました。すぐれた外科医術による手術の経過はたいへんよく、思つたより早く祖国へ帰ることができました。この間ソヴエトの皆さんのゆきとゞいた配慮と手厚い看護と日本からのみな様の暖いはげましに心から感謝しております。さらに健康の完全な快復につとめつゝ「日本のうたごえ」の一層の発展と平和と幸福な生活の建設のために微力をつくしていきたいと願つております。

今後とも何卒よろしく御願い申し上げます。

関さんのみやげ

病気のため参加できなかつた、関　鑑子さんは、代理を九州のうたごえに派遣し、訪ソ記念の人形絵皿を九州のうたごえのシンボルとして、九青の神谷国警君に手渡した。



関さんのみやげ

沖縄を返せが一位

一九五六年九州のうたごえ、創作曲、審査の結果、全司法福岡高裁の沖ナワを返せが一位になつた。

正しき戦争より不正なる平和を愛す